

Raffiné Journal vol.10

同じ言葉、違う声

同じ言葉なのに、
声だけが違う。

意味は同じはずなのに、
身体の奥で
何かはずれる。

言葉は変わらない。
変わるのは、
その出どころだけだ。

人は、同じ言葉を
いくつもの場所から話している。

役割として発せられる言葉。
状況を整えるための言葉。

そして、
内側から立ち上がる言葉。

表面では区別がつかない。

同じ語彙、同じ声帯、同じ口。

それでも、
身体はその違いを知っている。

ある言葉は滑らかに通り、
ある言葉はどこかで
呼吸を浅くする。

言葉の意味ではなく、
言葉の出どころが
身体の奥で響きを変える。

決められた言葉を辿るとき、
声は正確さを選ぶ。

順序を守り、
余白を埋め、
誤解が生まれないように整える。

そこには安心がある。

けれど、
その声は身体の深い場所までは
降りてこない。

言葉は通過し、
役割だけが残る。

一方で、
内側から立ち上がる言葉は
少し違う。

説明を整えなくても、
先に呼吸が動く。

声は
そのあとから追いつく。

同じ声なのに、
立ち姿だけが変わる。

聞いている側も、
その違いを
どこかで感じ取っている。

役割の声は、
社会を滑らかにする。

場を整え、
流れを止めない。

それは必要な働きだ。

ただ、
その声で立ち続けていると、
身体は少しずつ
自分の呼吸を忘れていく。

言葉は正しくても、
身体が静かに
違和感を残す。

言葉は同じでも、
声は同じではない。

それを決めているのは、
語彙でも、
技術でもない。

言葉が
どこから立ち上がったのか。

ただそれだけで、
声の質は変わる。

身体は、
その違いを
いつも先に知っている。



R.

Raffiné Journal vol.10
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné